



NPO 法人 日本自治 ACADEMY10 周年記念事業

高校生が思い描く「未来の北海道」作文コンクール スピーチコンテスト（審査結果）

最終審査結果

	出 場 者	高等学校名	スピーチタイトル
			スピーチサブタイトル
グランプリ	小野 素希さん	札幌東高校	最も若い高齢者の住む北海道 北海道の自然を活かした道民の健康づくり
準グランプリ	伊藤 絢優さん	下川商業高校	廃棄物から生まれるもの 循環型社会による利益
	植竹 優喜さん	札幌東高校	北海道新幹線が運ぶ北海道の未来 北海道新幹線の今後の役割と可能性
ACADEMY 理事長賞	北所 昌尚さん	札幌東高校	50年後の北海道へ アイヌの人々へ、輝きを
グリーン シード賞	加藤 巧也さん	とわの森 三愛高校	祖父の背中を追って 私の守るべきもの
夢ロマン賞	小泉理咲子さん	札幌東高校	グローバル化への転換 外国人の定住促進と農業の再興
	堀田 優菜さん	江陵高校	50年後の看護師像 患者さん思いの現場づくりを目指して



その先の、道へ。北海道
Hokkaido. Expanding Horizons.



賞 名	グランプリ		
氏 名	小野 素希（おの もとき）さん		
学校名	札幌東高等学校	学年	2 学年

タイトル	最も若い高齢者の住む北海道 ～北海道の自然を活かした道民の健康づくり～
------	--

多く人は北海道といえば新鮮な野菜や魚、豊かな自然を思い浮かべるでしょう。観光客もほとんどがこれらの自然を求めて訪れています。しかし現在、この北海道の第1次産業を支えているのは少数のお年寄りであり、彼らにかかる負担は計り知れないほどでしょう。これから50年後、今深刻な少子高齢化や、農産業従事者の高齢化問題、後継ぎ不足問題が果たして改善されているかという、そうではないと思います。まして少子化により50年後、60代になった私たちの世話をしてくれる人は急減し、機械がさらに発達することで生活習慣病患者が増え、寿命は縮み、人口減少。高齢者の割合が高い北海道にとってこの状況は他県よりいち早く訪れることでしょう。今、北海道はこの高齢者の問題を解決すること非常に重要なのです。

そこで私はこう考えました。高齢者を世話する人がいないなら、高齢者自身が自ら健康を保ち、世話が必要な場面をなるべく作らないようにしたら良いのではないかと。

北海道は自然がとっても豊かで空気がきれいです。また野菜や魚や肉も新鮮で健康に良いものばかりです。北海道の新鮮な特産物を活かした食生活の改善。ファストフードで食事を済ませがちの人々には特に勧めるべきです。しかし食べ物を活かすにしても作る人がいないならまったく意味がありません。なのでグリーンツーリズムやエコツーリズムを活発に行って、今の若者へ自然と触れ合うことがどれだけ楽しいのか、どれだけ大切なのかを伝えるべきだと考えます。また、札幌や旭川などの都市部にもスーパーではなく、市場を設け、生の食べ物を見せて北海道の新鮮な食べ物をより身近に置くのも良いでしょう。これらによって若者たちの第一次産業への関心は高まり、後継ぎ問題が少しは改善されるのではないかと思います。

その他にも、休日には家族でハイキングや海での海水浴、冬にはウィンタースポーツを楽しんで体を動かすことも健康維持にはとても役立つでしょう。これほど健康保ちに必要な環境が整っているのは他県にもあまりありません。これらを活用せずにいるのは大きな損をすることだと思います。

高齢者の増加を抑えることは不可能です。それなら発想を転換して、北海道の自然を活かした道民の健康維持で心身ともに元気で若い高齢者が住む都市を作り上げるのはどうでしょうか。笑顔の絶えない町、元気なおじいちゃん、おばあちゃんと一緒にする楽しい食事の場、考えただけでワクワクしませんか？

「他県と比べてどうしてこんなに北海道の人は活気が溢れ、元気なんだろう」「北海道に行ってみたい」「暮らしたい」そう思ってもらえるようになるのが私の思い描く50年後の故郷、北海道です。



賞 名	準グランプリ		
氏 名	伊藤 絢優（いとう あゆ）さん		
学校名	下川商業高等学校	学年	2 学年

タイトル	廃棄物から生まれるもの ～循環型社会による利益～
------	-----------------------------

私たちがすんでいる北海道はとても自然豊かで北海道にしかない素晴らしいものが沢山あると思います。この自然を守り抜いてきたからこそ今の北海道があります。環境の整った北海道だからこそ、環境の原因の一つとなる「廃棄物」について考えていきたいと思います。

私が住んでいる下川町は、環境未来都市に認定されています。環境未来都市とは、環境や高齢化、人類共通の課題に取り組み、先端的プロジェクトを行う地域のことです。下川町で行っているものは、「ゼロエミッション」という取り組みです。この取り組みは、廃棄物をできるだけ出すことなく、木材の余分な部分も上手に利用し、廃棄物を減らし資源に再利用するというものです。環境に優しく、商品として売れば町の利益にもなり、PRとして使えばとても効果のある、下川にしかできない良さが詰め込まれた取り組みです。

その例として、「割り箸」が挙げられます。下川町では、先ほども説明したとおり、余った木材などで割り箸を作っています。本来は、捨ててしまう部分を有効に活用し、エコでかつ商品としてもとても価値のあるものです。割り箸は、どんなものでも同じに感じますが、北海道で育てられた国産間伐林を使用していることから、とても上質かつ地球環境保護に適しているものだと分かります。

そしてもう一つは「木炭」です。木炭は、昭和六十年に起きた大洪水により育ててきた森林が大きな被害を受け、廃棄物になる木材を再利用できないかと木炭にしたことが始まりです。現在では木炭を町内の商店などで販売されています、さらに、木炭の煙を冷やす事で搾取できる「木酢液」は、そのまま商品化する以外にも材木に浸透させて燻すことで防腐効果のある燻煙材をつくるなど様々な使い方で活用されています。木炭を作るだけではなく、そこからとれるものも環境に配慮した商品を生むことができる、そして利益を生むことができる木炭の使い道が何通りもあることで、下川町にとっては、とても重要で大切なものになっています。

こうした取り組みから環境未来都市に認定されるなど、まだまだ幅広く再利用できるものがあると思います。下川町の取り組みについてお話しましたが、これを北海道全体が自分の市町村で特有の再利用から生み出すものが、これからの北海道の環境を変え、今、問題である過疎化している市町村については、市町村特有の商品としてPRに使い、外部に情報を発信し、移住者を増えるきっかけを作ることができるという事など、まだまだ再利用から生まれるメリットは計り知れないものがあると思います。北海道ならではの「廃棄物を再利用する」という方法を北海道の未来に残していきたいと思います。



賞 名	準グランプリ		
氏 名	植竹 優喜（うえたけ ゆうき）さん		
学校名	札幌東高等学校	学年	2 学年

タイトル	北海道新幹線が運ぶ北海道の未来 ～北海道新幹線の今後の役割と可能性～
------	---------------------------------------

2016年3月26日について北海道新幹線が開業した！多くの道民は待ちに待った新幹線を見て、北の大地を力強く走る姿を想像し、胸を高鳴らせた。道民の夢が叶った瞬間だった。

現在、北海道新幹線は新青森～新函館北斗間を運行している。2031年にはこれが札幌まで延長される予定だ。これにより新青森～札幌間と東京～札幌間は短縮されると予想される。このことはただ単に時間距離がみじかくなっただけでなく本州と北海道がはじめて新幹線で結ばれたということから、北海道にとって主要な産業のひとつである観光業において今までにない、大きな可能性が生まれたと私は考える。

具体的にどのような可能性が秘められているだろうか。今まで、本州の人は北海道に旅行するとき、「飛行機に乗る」か「フェリーに乗る」の二択をあたえられた。このことは肉体的にも精神的にもハードなものである。実際、私は小学3年の頃まで本州に住んでいた。そのとき私たち家族は、毎年、飛行機で母方の祖父母の家がある北海道に行くことが定番になっていた。私にとっては家族団楽しい記憶だけが残っているのだが、母は大変にくたびれた記憶が残っていると後に聞いたことがある。母は広い空港を赤ん坊だった私をおんぶしながら、幼い私の兄を連れて歩くのがとても大変だったと私に話してくれた。このような従来の北海道旅行の難点を北海道新幹線は軽いものにしてくれると考えている。

また、他にも新幹線は大きな可能性を持っている。それは北海道がヨーロッパへの玄関口になるというものである。そもそも、北海道新幹線の開通が重要視された大きな要因として全国新幹線鉄道整備法第4条に基づく、建設を開始すべき新幹線鉄道の路線を定める基本計画に青森市～札幌市間が追加されたことにある。そしてこの計画により1973年に札幌市～旭川市間も追加された。このことは新幹線が旭川までつながる可能性があることを意味している。ここからは私の夢を語る部分も多いのだが、旭川までつながった新幹線がさらに進化し続け、科学技術の進歩のあと押しもあり、ロシアまでつながったとしよう。人々は北海道新幹線から世界最大の鉄道であるシベリア鉄道に乗り換えることが可能になる。そして鉄道に揺られながらモスクワ、サンクトペテルブルク、そしてヨーロッパへ。私たちは北海道新幹線からユーラシア大陸を横断するヨーロッパまでの長旅を楽しむことが可能になる。

私はこの旅が実現したらぜひ体験したい。私だけでなく多くの人がこの体験したいはずだ。その理由に、この旅には大きな夢とロマンが詰まっているからだと思う。最後に、人々が一度は経験したいと思うこんな希望の実現の可能性を北海道新幹線は持っている。そして、それこそが北海道新幹線の最大の魅力と私は思う。北海道新幹線が道民だけに限らず、多くの人の夢を乗せて走るとき、私たちのくらす北海道の未来は明るいと思う。



賞 名	ACADEMY 理事長賞		
氏 名	北所 昌尚（きたじょ まさなお）さん		
学校名	札幌東高等学校	学年	2 学年

タイトル	50年後の北海道へ ～アイヌの人々へ、輝きを～
------	----------------------------

50年後の北海道は、アイヌの人々がもっと輝く北海道であってほしい。私はアイヌ民族ではないが、そういう北海道を望んでいる。

北海道に住んでいる人々の多くは恐らく、昔、本州から移住してきた人々の子孫だろう。我々の先祖は過去にアイヌの人々に対し、様々な差別的待遇をしてきた。不当な貿易やイヨマンテなどの文化の否定など、調べれば多数、その非人道的行為を認知することができるだろう。北海道は、元々アイヌ民族のものだったのだ。だから、かつての先祖がしでかした過ちを詫びると共に、今日に至るまで、共存させてもらえたことに感謝するため、50年後の北海道はアイヌの人々が輝く北海道であってほしいと思うのだ。

では、その為に具体的に何をすればいいのか、ということを2つほど書き記していこうと思う。

1つ目の案は、アイヌ民族感謝の日を北海道で制定することだ。その日には、様々な市区町村でアイヌについてのイベント（例えばアイヌの伝統料理博覧会、アイヌ民族道具展覧会、等）を行ったりし、アイヌ民族への理解を深めるのだ。そういった日が制定されれば、テレビで放送などもされて、毎年最低でも一回は、多くの人がアイヌについて触れる機会を得られるのだ。別に、祝日として制定する訳ではないので簡単だと思う。

2つ目の案は、アイヌ語の勉強を学校の授業に取り入れることだ。これを実現するのはかなりの難度があると思う。しかし、もしそれを実現できたとしたら、それはとても素晴らしいことだ。アイヌ語を勉強したところで、話すことはほぼゼロだし、入試にも出ないんだから、わざわざ授業で扱う必要は無いといった意見も恐らく出るだろう。私は会話できるようになろうだの入試にも出そうだのと言っているわけではない。私が伝えたいことは、あくまで文化の保存が目的だ。文明はいつか廃れ、消え去っていく。それは歴史が教えてくれているだろう。マヤ文明やメソポタミア文明などがその例だ。文明が無くなることは文化が無くなることと同義であると思う。50年後の北海道でアイヌ文化がこの文明たちと同じ道を辿ることが無いよう、最も大事な言葉の消失は避けなければならない。だから、アイヌ文化を絶やさないために、学校でアイヌ語の授業をしたほうがいいと思うのだ。

50年後、というと、今の私は16歳なので66歳になっている。これは個人的な話であるが、私は恐らく早死にすると思っているので、もしかしたらその頃にはもうこの世にいないかもしれない。しかし、もし生きていて、この目でアイヌの文化が輝く北海道を見ることができたなら、これほど幸せなことは無いだろう。50年越しの夢が叶っているのだから。死んでいたとしても、私の夢が叶っていることを、切に願う。



賞 名	グリーンシード賞		
氏 名	加藤 巧也（かとう たくや）さん		
学校名	とわの森三愛高等学校	学年	2 学年

タイトル	祖父の背中を追って ～私の守るべきもの～
------	-------------------------

私はこの北海道の広い大地、青い空の下で死にたい。私は祖父の影響からそう強く思うようになりました。母方の祖父は、もともと東京に住んでおり、個人タクシーを経営していました。あの重く苦しいような空気、狭く息苦しい場所から離れたいと思っていたと聞きました。そして、私の家族に会いに北海道を訪れることが何度かありました。数年に一度しか来れないものの、その目はいつも輝いていました。それから何年も経ち私は、母から祖父、祖母が東京から引っ越してくるとききました。祖父母が引っ越してきたところは私の家から車で十分くらいのところで毎週会うことができるようになりました。

ある時私は祖父に「なぜわざわざこんな田舎にきたの？」とききました。すると祖父は「この北海道の空気と広い大地で死にたい。そのためなら少し不便でも、寒くても構わない。」と言ったのです。ただただかっこよくて、自分勝手だけれど何歳になっても生きる目標をもっている祖父に憧れました。

しかし、その祖父は北海道で五年前ほど過ごして亡くなってしまいました。最期は、苦しむことなく静かに逝ったそうです。祖父はどんな自然を感じて逝ったのだろうか。祖父の感じた自然こそ五十年後残っていなければならない自然なのではないかと思うようになりました。

将来私は、酪農家という自然に大きく関わる仕事に就きます。つまり私には、自然を守る義務があります。具体的には、草地や糞尿の処理など多くの問題があります。しかし、全ての酪農家はそれをクリアし、僕たちに牛乳を届けてくれています。将来その一員となる者として、責任は大きいです。決して簡単なことではありません。でも、憧れである祖父のような生き方のためなら苦ではありません。どんなに辛くて難しくても、おいしい牛乳を届け、大好きなこの自然を守るには、努力を惜しみません。

人はいつか死にます。私には目指すべき最期があります。自分一人の力では、どうにもならない問題だってあります。でも、自分だけでも変わることができないと何も進みません。北海道のこの広い大地と青い空がいつまでも残されるよう、守る人として努力し日々祈り続けます。



賞 名	夢ロマン賞		
氏 名	小泉 理咲子（こいずみ りさこ）さん		
学校名	札幌東高等学校	学年	2 学年

タイトル	グローバル化への転換 ～外国人の定住促進と農業の再興～
------	--------------------------------

北海道は150年の歴史の中で、農業によって発展してきたと言っても過言ではない。家の近くには田んぼや畑があり、家庭菜園は当たり前。北海道の強みと言え、やはり農業なのである。食料自給率が低い都府県に安定した食料を供給してきた北海道は、日本全体の発展に貢献してきたとも言えよう。

しかし現在、北海道では農業従事者の高齢化および後継ぎ不足により、その人口が減少している、すなわち、北海道の強みの一つが徐々に失われようとしているのだ。そこで私は、農業をはじめとした過去150年間北海道をここまで成長させてくれた営みも大切であるが、北海道には新たな強みが必要であると考えます。

私が考えるに、これからの北海道を左右するのは、ずばり外国人である。北海道は日本国内でも観光地として人気であるが、外国人観光客からの人気も非常に高い。特に札幌やニセコは常に外国人であふれかえっている。平日に札幌の大通りを歩けば、聞こえてくるのは日本語ではなく中国語や英語が多いことからわかるだろう。それもそのはず、日本では人口減少が著しい（もちろん北海道も例外でない）が、世界的に見ると数年前に世界の人口が70億人を突破したことからわかるように、人口は増え続けている。彼らを北海道に招くことが出来れば、北海道は更なる発展が見込めるはずだ。

すでに北海道では、店頭で外国語対応可能な店員を置いたり、多言語対応可能な電子案内板があったり、外国人観光客が多く来る街には免税店が多く見られたりと、観光客への対応は非常に手厚い。その対応に満足した外国人に次に踏ませたいステップは北海道への定住だ。現在も前述のニセコにはオーストラリア人をはじめとした多数の外国人定住者がおり、そこで日本人と結婚し家庭を持っている方も大勢いる。私は北海道全体をこのようにしたいのだ。

いま日本企業では、数か国語での会話が可能で、国際的な視点を持つグローバルな人材が非常に求められている。国際教養が売りの有名大学の就職率はほぼ100%だ。ニセコのように両親のどちらかが外国人であったり、身近に外国人がいたり、幼年期から日本と外国との国際的な違いを見いだせる環境が北海道全体に与えられれば、北海道はグローバル化が進み経済的な発展が見込めるうえ、外国の方もより北海道を訪れやすくなるのではないだろうか。

グローバル化ももちろんだが、冒頭で述べた農業従事者不足も解消しなくてはならない。その問題も外国人を積極的に北海道へ招き入れることで同時に解消されるのではないだろうか。海外にも優れた農業技術を持つ方は大勢いる。そのような外国人を北海道に定住させることが出来たらまさに一石二鳥なのだ。

200周年を迎える北海道には国際的な考えが養われた若者や子どもたちが多くいることを願う。



賞 名	夢ロマン賞		
氏 名	堀田 優菜（ほりた ゆうな）さん		
学校名	江陵高等学校	学年	3 学年

タイトル	50年後の看護師像 ～患者さん思いの現場づくりを目指して～
------	----------------------------------

「おばあちゃんは、今一生懸命頑張っているから大丈夫。」私はある看護師の方が言ったこの言葉ひとつにとても救われました。

私が幼いころ、私の目の前で大好きな祖母が脳幹出血で倒れてしまいました。その時、目の前で祖母が倒れたという衝撃と祖母に何もしてあげられない自分の無力さに私はただ泣くことしかできませんでした。治療室に運ばれていく祖母の姿を見て不安に押しつぶされそうな私たち家族に励ましの言葉をかけてくれた看護師の方を見て、強い憧れを抱き、現在、看護師を目指しています。

私が幼いころ、患者さんだけではなくご家族にも寄り添い、患者さんにより良いケアを提供することができる素晴らしい人というイメージを看護師に持っていました。ですが、福祉の勉強や施設見学、看護体験に参加する中で、北海道は東京に次いで病院の数が多く、人口も八番目ということに対して、病院一施設の看護師の数が全国で六番目の少なさであり、全国の主要都道府県とで看護師の数を比較すれば、出産や勤務の過酷さを理由に離職する看護師が相次ぎ、看護師数ワーストワンという統計結果が出ていることを知りました。また、実際に病院の施設見学をした際に、看護師の人手不足が原因で医療業務に追われ患者さんとの関わりが少なくなっているという現実を知りました。日本全国的にもその過酷労働から、新人看護師が業務に追われ患者さんやご家族との関わりどころか知識や技量を磨くことができない、また患者さんを助けるために頑張っている看護師が過酷労働という原因で死んでしまうという現状が問題視されています。

これらのことから私は、人員不足の解消を図るために看護職の増員も必要ですが、資格を持っていながら看護師ではない潜在看護師が看護職に復帰することが必要とされるのではないかと考えます。潜在看護師が増加する要因として出産・育児による離職からの業界復帰が上げられます。そのため潜在看護師対策として、子育て支援に力を入れて取り組むべきだと考えます。男女ともに家庭を持つ看護師が働きやすいよう施設内外に提携した託児所を作る、看護師間でも育児経験がある看護師が子育てについての相談や助言をし、働きながら育児をしやすい環境を作るなど子育て支援が必要だと考えます。

潜在看護師は、現場での知識や経験がある場合が多く、一から指導や現場経験の必要な新人看護師とは違い、復帰後すぐに戦力となることができます。職場は指導に人員を割かずに看護師を増員することができ、業務の分担が可能になります。また、業務に余裕が生まれることで新人看護師の育成にも力が入るという好循環が生まれていくと考えます。

最後に、50年後の看護師が私の憧れた看護師の方のように、より良いケアの提供と患者さんやご家族に寄り添うことを両立しながら働いていることを望んでいます。